



TŌZIKI KAIKAN



TŌZIKI SENTĀ



YAMASIGESYŌTEN



MOMENGURA

YŪBINKYOKU



SUMI KAIKAN

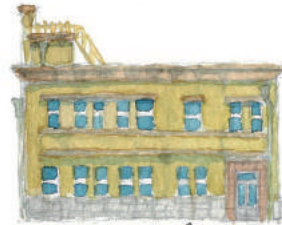


KAMAŌARU HIROBA

AITI NO TATEMONO
MONODUKURI HEN

あいちのたてもの
ものづくり編

REGISTERED TANGIBLE
CULTURAL PROPERTY



KANKYŌMIRIN

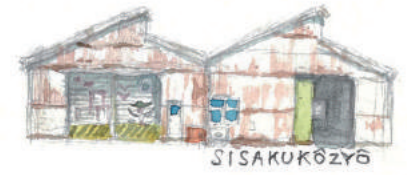


NAKASITI MOMEN



HAKKENKAN

AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS,
GOVERNMENT OF JAPAN



SISAKUKŌZYŌ

あいちのたてもの
ものづくり編



NAKASADASYŌTEN

愛知県登録有形文化財
建造物所有者の会



HATTYŌMISO

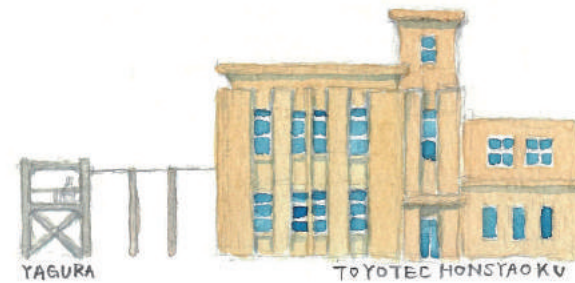


KŌKONOEMIRIN



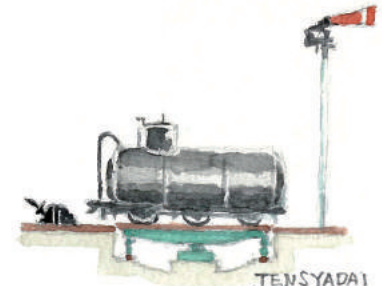
HANDA AKARENGATATEMONO

愛知登文会



YAGURA

TOYOTEC HONSHAOKU



TENSYADAI

あいちのたてもの
ものづくり編
MAP



あいちのたてもの
ものづくり編

絵文 村瀬良太

- 1 名古屋陶磁器会館 »p.10
- 2 日本陶磁器センター »p.12
- 3 旧山繁商店 »p.14
- 4 窯のある広場・資料館 »p.16
- 5 八丁味噌本社事務所 »p.20
- 6 中定商店味噌蔵 »p.22
- 7 九重味淋大蔵 »p.24
- 8 甘強味淋本社事務所 »p.26
- 9 半田赤レンガ建物(旧カプトビール製造工場) »p.28
- 10 木綿蔵ちた(旧竹内虎王商店木綿蔵) »p.32
- 11 旧中七木綿本店 »p.34
- 12 豊田市近代の産業とくらし発見館 »p.36
(旧愛知県蚕業取締所第九支所)
- 13 墨会館 »p.38
- 14 トヨタ創業期試作工場 »p.42
- 15 旭サナック本館 »p.44
- 16 旧国鉄武豊港駅転車台 »p.48
- 17 トヨタテック本社社屋(旧豊川電話中継所) »p.50

はじめに

私たちのまわりには、
 古めかしい洋館や、立派なお屋敷、歴史のある校舎に、荘厳なお寺、
 可愛い教会堂や、大きなレンガの工場、
 そして役割を終えた電波塔など、年月を重ねた建物が、
 ごく自然に街にとけ込んでいます。
 そういった文化財として貴重な建物を国登録有形文化財といいます。
 日本には他にも、重要文化財や国宝などに指定された建物があり、
 現在その総数は、1万5000件ちかくに上ります。
 市指定・県指定のものを含めると、さらにその数は増えますが、
 一方で、フランスの規定する歴史的記念物の4万4000件には遠くおよびません。
 日本は文化的には、まだ発展途上なのです。

本書は、愛知県にある国登録有形文化財の魅力を紹介する本です。

愛知県には、さまざまなタイプの建物が残っています。
 ですが、それらはすべて、あたりまえに残ってきたわけではありません。
 多くの人々の努力で残されてきたものも少なくないのです。
 そういった意味では、残された建物はすべて価値のある良い建築といえます。
 そんな身近にある良い建築を知ることで、
 私たちの街とその風景を大切に思う気持ちにつながってほしいと思います。
 パリの美しい街並みも、フランスの人々がその重要性に気がつき、
 建物と景観を大切に保存するまでは、多くの経験を積んできました。

この本が、建物と街の歴史を知る一助になることを願っています。



もくじ

はじめに 2

愛知の建物、ものづくり編 4

【コラム】建物を楽しむために 8

◆窯業 9

名古屋陶磁器会館 10

日本陶磁器センター 12

旧山繁商店 14

窯のある広場・資料館 16

【コラム】愛知県陶磁美術館 18

◆醸造 19

八丁味噌本社事務所 20

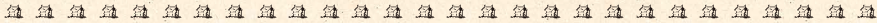
中定商店味噌蔵 22

九重味噌大蔵 24

甘味味林本社事務所 26

半田赤レンガ建物（旧カプトビール製造工場） 28

【コラム】明治村と菊の世酒蔵 30



◆織維 31

木綿蔵ちた（旧竹内虎王商店木綿蔵） 32

旧中七木綿本店 34

豊田市近代の産業とくらし発見館
 （旧愛知県蚕業取締所第九支所） 36

墨会館 38

【コラム】ノコギリ屋根の工場 40

◆機械 41

トヨタ創業期試作工場 42

旭サナック本館 44

【コラム】トヨタ産業技術記念館 46

◆鉄道・通信 47

旧国鉄武豊港駅転車台 48

トヨタック本社社屋（旧豊川電話中継所） 50

【コラム】旧豊川装荷線輸用櫓 52

飯田喜四郎先生特別インタビュー
 「文化財としての建物」 53

建物特別公開 54

国登録有形文化財とは 56

愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会とは 56

愛知の建物、 ものづくり編

はじめに

愛知の近代化の歴史を眺めてみると、その背景には産業が大きく関わっていることがわかります。また、産業の発展を促した鉄道の敷設や港の開港などのインフラ整備も、車の両輪として重要な役割を果たしました。

ただ愛知のインフラ整備は、東京や大阪と少し状況が異なっていました。それは、これらの事業が国の主導ではなく、愛知県・名古屋市などの地方官庁と民間企業の協力で進められたからです。

本書で紹介するのは、愛知の近代化を推し進めた産業に関わる国登録有形文化財の建物たちです。往時の面影を色濃く残す建物は、愛知の近代化という軸と重ねることで、その頃のようなすを鮮明にイメージさせてくれるでしょう。

名古屋の歴史と明治維新

愛知の近代化の舞台の中心は名古屋でした。

名古屋の歴史は、徳川家康が城を築いた約400年前に始まります。碁盤の目状の城下町もその時に造成され、徳川家の重要な拠点として発展しました。また、名古屋の中心を流れる堀川は、城や町をつくるために開削された運河で、その後も名古屋の物流のかなめとして活用されました。

ちなみに、愛知県下の蟹江川や十ヶ川(半田運河)、矢作川なども江戸時代に整備された水運です。その下流付近には港が設けられ、熱田など古くからの港も再整備されて、物流の要所として賑わいました。一方、東海道の整備に伴い、岡崎や豊橋などの城下町・宿場町には多くの人々が往来し、陸路も発展しました。

しかし、明治維新という一大転機を迎えると、新政府の置かれた東京や大阪をはじめ、新しく港の開かれた横浜、神戸が商業や産業の中心になりました。そして、徳川家の拠点だった名古屋は新政府の計画から距離を置かれ、新しい時代から取り残されていきました。



鉄道と港、2大インフラ整備への道

明治22年、大日本帝国憲法が公布されると、それにあわせて国土の整備が進められました。東京―大阪間をつなぐ幹線鉄道が敷設されたのもこの頃です。

明治17年の計画では、この路線は中山道を経由するルートで進み、名古屋は幹線鉄道から外れていました。この危機的状況に立ち上がったのが名古屋区長(現在の市長)吉田禄在(よしだ りくざい)です。吉田は何度も東京へ出向き、路線計画を東海道路ルートへ変更するよう陳情します。やがて、政府から名古屋駅と市街地をつなぐ広小路通の延長を条件に、東海道路ルートへの変更が決まりました。これには名古屋商工会議所など民間企業が協力しました。

東海道本線の誘致により、人も物流も大幅に増加した名古屋は、最重要の課題だった大型船の入港できる名古屋港の築港計画を進めます。貿易の拠点となる港の建設は、産業にとって何より重要でした。

明治29年、愛知県は明治政府に築港の事業計画を要請します。しかし政府は小樽港の建設を理由にこれを却けます。莫大な資金のかかる築港は、国の支援なしでは難しい大事業でした。しかし、愛知県と名古屋市、そして民間企業は、これを自分たちで行うことを決断します。全国ではじめての試みでした。

護岸工事には、土木技師服部部長七が開発した人造石工法「長七たき」を大々的に採用することで工事費を大幅に抑えました。また反対が大勢だった世論を説得し、明治40年、ついに名古屋港が開港しました。この時、名古屋の水運の中心は未だに堀川でした。

そして愛知の産業は、ここから飛躍的な発展を遂げていくこととなります。

近代産業の発達

大正時代の終わり頃には、名古屋の貿易高は全国3位の神戸と肩を並べるまでに成長しました。中心となった産業は、江戸時代から愛知に根付いていた繊維業や



窯業で、新たに登場した機械業がそこに加わります。また、古い歴史を持つ醸造業の発展も見逃せません。

織維業では、名古屋紡績を合併した関西の三重紡績(後の東洋紡績)が台頭し、窯業では日本陶器(ノリタケカンパニーリミテド)、機械業では豊田自動織機製造会社(トヨタ自動車の母体)、醸造業では半田のミツカンなど、全国有数の大企業が登場します。それらの工場は、名古屋はもとより愛知県下に広く建設されました。ところで、織維業や機械業の工場の多くは、資材の調達に便利で動力の供給に適した河川や運河沿いに建てられました。これは、機械化が進み動力の蒸気機関に必要な水のある地域が適していたからです。栄生の豊田自動織布工場(トヨタ産業技術記念館)や刈谷の豊田自動織機製作所(トヨタ創業期試作工場)、また、時代は下りますが、一宮の墨会館近くも木曾川の豊かな水を利用した工場地帯でした。

一方、窯業は、名古屋駅の近くに日本陶器が大規模な工場を建てましたが、それ以外では名古屋陶磁器会館のある東区の白壁界限に多く点在しました。半田のカブトビル製造工場(半田赤レンガ建物)などの醸造業も、土地の気候風土や地形、また原材料の入手に適した港や駅近くに工場を建設し、発展していきました。横浜や神戸が重工業で発展したのに比べ、愛知は零細企業が多かったのも特色です。

世界最高のものづくり

昭和4年、世界大恐慌により、アメリカをはじめ各国の経済状況が大きく揺さぶられました。また、長く日本の輸出を支えてきた生糸が衰退し、養蚕に力を注いでいた旧愛知県蚕業取締所第九支所のある挙母町など三河地方も大打撃を受けます。

産業はこれまでも、大きな世界変動の影響をたびたび受けてきました。日露戦争や第一次世界大戦が織維産業の発展につながったこともあります。

また第一次世界大戦を機に、名古屋港近くに熱田兵器製造所が建てられました。

次いで三菱内燃機(三菱重工)や愛知時計電機などの飛行機工場も建設され、名古屋港は航空機産業の中心地になります。その頃の飛行機はほぼ木製で、江戸時代から木材を主要な産業としてきた名古屋は、飛行機製造に適していたのです。宮崎駿監督の「風立ちぬ」の舞台が名古屋だったのは、そんな背景があるからでした。

昭和14年、三菱重工のエンジニアの堀越二郎が三菱A6M3零式艦上戦闘機を完成させます。通称「零戦」の登場は、世界の空を震撼させました。ジャンルは違いますが、大正14年に豊田佐吉が完成させたG型自動織機とともに、愛知のものづくりが世界最高の水準に到達した証でした。

しかし一方で、軍事化の波が、愛知の産業とその工場に兵器工場への転用を迫りました。戦争の暗い影が社会全体を覆っていった時代でした。

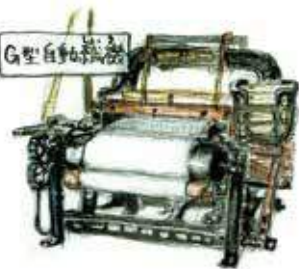
おわりに

昭和20年、戦争が終わると、名古屋は焼け野原になっていました。航空機の製造工場が集中していた名古屋は徹底的に爆撃され、岡崎や豊橋など軍需工場があった都市も空襲で甚大な被害を受けました。その中で、大隈鐵工所旭製造工場(旭サナック)のように、戦災を免れた稀有な兵器工場もあります。

しかし、焼け野原になった街で、もう一度産業を復興させようと動き出した人々がいました。それは、明治以降、愛知の産業を支えてきた愛知県や名古屋市など地方官庁と、商工会議所ら民間企業の人々でした。

それから70年以上が経ち、愛知は戦前とは比較にならないくらい大きく成長しました。街には自動車が増え、人々は好きな衣服に身を包み、うまい飯を腹いっぱい食べられる社会を手に入れました。

そんな社会の片隅では、産業の歴史を共に歩んできた建物たちが、今もゆっくりと時を刻んでいるのです。



建物を楽しむために

【建物を見るコツ】

古い建物を見るだけで楽しいものです。

例えば、予想もしない場所で素敵な洋館に出会った時。また細い路地の先にノコギリ屋根の大きな工場が続いていた時。いつもの街並みからは想像もできないところでそれらの建物を見つけた時は、まるで大切なたからものを手に入れたような気分になります。

建物を楽しむ手段はひとそれぞれ、ことさらに見方を促す必要もないのですが、あえてガイドラインを紹介するなら以下のようなようになるでしょうか。

まず、建物の周りの状況を眺めてみる。なぜそこに、この建物がたっているのかを探ってみます。眼の前の道や周囲の街並みがヒントになるかもしれません。

それから、建物をじっと見つめてみる。目から伝わる情報は、人間の知覚のかなめです。最初は感覚でもいいです。ああ、優しい感じだな、とか、なんだか恐ろしいな、とか。そうやって、建物の雰囲気を感じてみてください。

とはいえ、相手は大きな建物です。上手くないかもしれません。その時は、ディテール(細部)を目で追いかけてみてください。優しい感じはタイルの色味が理由かもしれませんし、恐ろしい感じは、古い柱の今にも崩れ落ちそうなようすが原因かもしれません。

建物の雰囲気を味わえるようになったならあと一息です。そこから、建物の辿ってきた物語へ想像の翼を広げてみましょう。建てられた年代や、様式やデザイン、構造の種類などの専門的な知識があれば、よりリアルに想像することができます。所有者やガイドボランティアから話を聞くことも、きっと役に立つでしょう。

建物を理解するうちに、その建物がいつのまにか大好きになっていけば、あなたはもう立派な建築マニアです。

【近代建築について】

ところで、本書に登場する建物のうち、近代建築というくりに紹介されているものがあります。特徴としては、機能に即したかたちを追求した建物、ということができると思います。

例えば工場は、広い空間で効率よく機械を置くために構造を工夫し、鉄骨造や鉄筋コンクリート造の大空間がそれに応えました。その点では、木造トラスの蔵やノコギリ屋根も近いところがありますが、鉄骨や鉄筋コンクリートはそれとは比較にならない広いスペースを手に入れられたのが画期的でした。

また近代建築のデザインを昇華させたのが、巨匠と呼ばれる人々です。フランスのル・コルビュジエや、ドイツからアメリカに渡ったミース・ファン・デル・ローエ、同じくアメリカにはフランク・ロイド・ライトがいました。彼らが探求した近代建築の新しいかたちは、世界中を席卷しました。

【建築マニアの嗜み】

本書で紹介する建物について、以上のことを意識しながら読んでいただければ、その良さがより伝わるのではないかと思います。

最後に、建物はそれを使用し管理する所有者がいて、はじめて姿を保つことができます。見学する際には、建物へのいたわりの心を持って、大切に扱きましょう。また、中には見学のできない建物もあります。そういった場合は無理をしないこと。じっくり機会を待てばいつか見ることができる、その日を信じて無茶をしないことも、建築マニアの嗜みなのです。

窯業

窯業とは、土や砂などを窯で焼成して、茶碗や皿、レンガやタイル、土管、碇子などを製造する産業。愛知では瀬戸や常滑を中心に、古くから営まれてきた。



photo: Hisao Takeuchi

スクラッチタイルの風合いが美しい外観。それぞれの面で表情が異なる。壁面に浮かぶ装飾が楽しい

名古屋陶磁器会館

黄色いタイルが美しい、名古屋の誇る昭和レトロ建築



玄関ホール。当時のままの内装

昭和初期のレトロ建築

名古屋陶磁器会館は、黄色いタイルの古びた風合いが美しい近代建築です。名古屋城から東へ約2キロ、国道19号線から少し奥まった場所にたっています。

このあたりはひと昔前まで、陶磁器に絵付けをする工場や商店、それを生業にする人々の長屋がひしめく加工生産地でした。明治の終わり頃、瀬戸や多治見などの生産地と近郊の大曾根駅や千種駅がつながり、そこから素地となる陶磁器の仕入れが容易になったのが理由です。絵付けをされた陶磁器は、堀川か

滲み出る想い

名古屋陶磁器会館は、すっかり変わってしまった当時の街の面影を、今に伝えていきます。それは、同館を管理する事務所や、ここにオフィスを構える店子によって大切に守られ続けてきました。戦後に増築された3階部分も、建物の雰囲気を変えないように注意が払われています。

そういった想いが館内を満たし、風合いを帯びた姿とともに、この建物を美しく彩っているのです。



大窓のついた階段室。黄昏時は格別



2階大ホール。木製の床に光が射し込む

ら名古屋港を通じてアメリカやアジアなどへ輸出されました。その最盛期に組合事務所として建てられたのが、名古屋陶磁器会館です。

タイルのデパート

外観を特徴づけている黄色いタイルは常滑で生産されたもので、スクラッチタイルと呼ばれています。よく見ると、引っ掻いた跡がめくれたような表情になっています。手作業で製

作されたため、同じ形のものはありません。

タイルは建物の全体を覆っていて、隅部や窓まわりには役物やくものという特注品で仕上げられています。このように、全体をひとつの塊のようにデザインしたのは、ドイツ表現主義建築に影響を受けたからと考えられます。

また、1階正面の半円窓や、コーニス(軒)やマリオン(方立)など立体感のある造形、軒下の装飾は、同じく当時注目されていたアール・デコに通じるデザインを思わせます。名古屋陶磁器会館は、建設当時の美しい内装を多く残しているのも特徴です。玄関ホールには、スタンドグラスと古い照明が灯り、床にはダイヤという古いタイルが当時のまま残っています。

また、旧応接室の壮麗な漆喰天井や、2階大ホールの浅いヴォールト天井と趣のある木製の床、モザイクタイルの張られた階段室と大窓など、館内はレトロな雰囲気であふれています。そのため、映画「三丁目の夕日」やドラマ「負けて勝つ」の舞台にも使用されました。

1階の展示室には、かつて名古屋で製作されていた陶磁器などが展示され、名古屋デコ盛りという特色ある装飾技法のワークショップも開催されています。

1932年(昭和7年)
鉄筋コンクリート造2階建て(一部3階)、
[設計]鷹栖一英・丹羽英二(実務設計)
[愛知県名古屋市長区徳川1-10-3
http://nagoya-touzikaikan.org



photo: Sayaka Ito

旧館の大会議室。戦後、陶磁器産業を左右する国際会議が開かれた歴史的な場所

日本陶磁器センター

ふたつの建物が絡み合う、レトロとモダンが共存する空間



裏通りに回ると見えるスクラッチタイトルのレトロな旧館

新・旧ふたつのレトロ建築

日本陶磁器センターは、複雑な経緯をもった興味深い建物です。それは、昭和9年に建てられたレトロな旧館と、昭和33年に建てられたモダンな新館が連結され、それぞれの空間が絡み合っており、共存していることに起因しています。

これには事情があります。戦後、名古屋の都市整備で旧館の前の道路が拡幅されることに

建物の1階にはイタリアンレストランが入り、新館と旧館を連結させた魅力ある内部空間になっています。また地下のワインセラーも見所の一つで、構造以外を自由に改変できる近代建築の特徴を巧みに利用しています。

建物が現すもの

旧館の大会議室は、戦後の陶磁器産業を左右する重要な国際会議が開かれるなど、歴史的な舞台ともなりました。

日本陶磁器センターの複雑で玄妙な佇まいは、そんな激動する時代に对应してきた陶磁器産業の歴史と重なる見えます。



新館地下のワインセラー

旧館について

旧館は、日本陶磁器工業組合連合会共同販売所として建設されました。いわば全国の陶磁器産業の組合事務所で、名古屋がその中心地だったことを物語っています。

建物の外観にはスクラッチタイトルが全面に張られ、ヴォリュームを意識した表現主義的な構成は、名古屋陶磁器会館とも通じるデザインです。設計と施工を担当した志水建築業店は、直前に同会館の施工に携わっています。

館内には古い設えが残り、2階の貴賓室には床の寄木細工や大理石のマントルピース、天井の漆喰細工が、また3階の大会議室には、ステ



旧館大会議室前のホール



新館の外観

ンドグラスなどの装飾が残されています。そして、風合いを帯びたタイトルがいたるところに残り、レトロな雰囲気醸し出しているのも特徴です。

新館について

一方の新館は、モダンデザインを強く意識した建物です。校通に面して水平に連続する窓が大きく開かれ、屋上には庇（現存せず）と建屋、1階はピロティ風の開放的な空間にするなど、近代建築の巨匠ル・コルブジェの作風を思わせます。以前の外観は白いタイトルが張られ、よりコルブジェ風の建物でしたが、現在は赤茶色の外装になっています。

【旧館】1934年（昭和9年）

鉄筋コンクリート造3階建て（一部4階）地下1階

【設計】施工 志水建築業店（設計担当 藤田進）

【新館】1958年（昭和33年）

鉄筋コンクリート造5階建て地下1階

【設計】山下 寿郎設計事務所

愛知県名古屋市中区代官町39-18

http://www.toujiki.org/

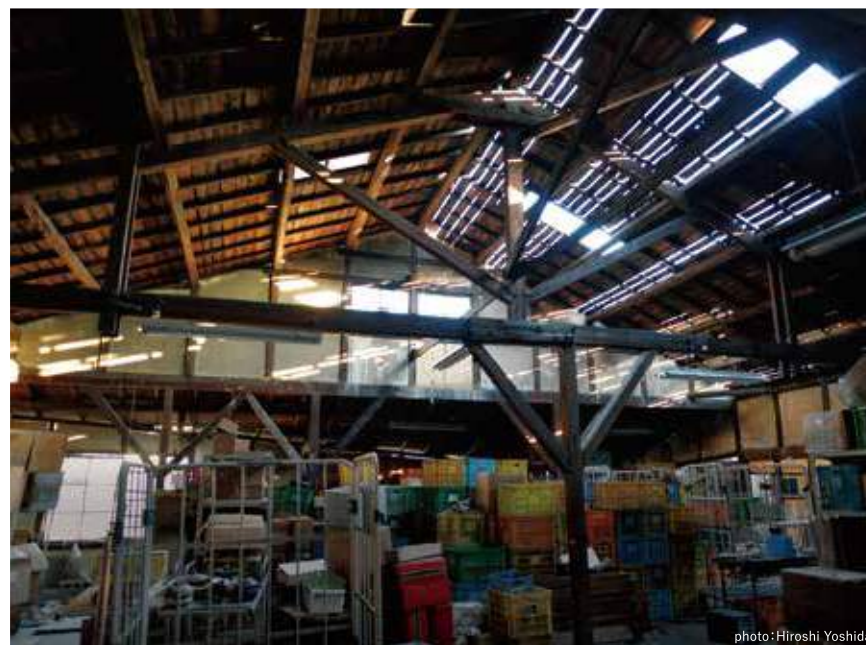


photo: Hiroshi Yoshida

奥倉庫内部。台風で飛ばされた屋根の隙間からドラマチックな光が射し込む

旧山繁商店

瀬戸の最盛期に建てられた、貴重な商店建築



離れの便所

窯業の街、瀬戸

名古屋の近代陶磁器産業を支えていた瀬戸は、古くから窯業で栄えた街です。

良質の土が得られ、瀬戸川を軸に丘陵地を利用した登窯などの窯場が築かれていた瀬戸は、明治以降の陶磁器産業の拡大とともに多くの工場が建てられて、大いに発展しました。最盛期には工場から上る煙で空は真っ黒だったといえます。

今では黒煙を上げていた工場も姿を消し、窯業を営む人々も減って、街に残るレトロな商店街が当時の面影を偲ばせています。

旧山繁商店は、そんな瀬戸の最盛期に財を成した商店の遺構です。

と、それをきっかけに一気に老朽化が進んでしまします。

現在、そんな状況にある旧山繁商店の建物たちを、瀬戸市と学識者、ボランティアが協力し合い、活用の道を模索しています。

愛知の陶磁器産業の一翼を担った商店の貴重な遺構が、今後どのように保存活用されていくのかが期待されています。



新事務所から倉庫越しに旧道方面を見る。正面に見えるのが離れの塀

名土加藤繁太郎とその商店

山繁商店は、旧名を山繁陶磁器商店といい、明治19年頃に創業された卸問屋です。創業者の加藤繁太郎は、瀬戸銀行や瀬戸自動鉄道株式会社の創立にも関わった実業家でもあり、当時の取引先は樺太から大分までほぼ全国に展開されていました。また3代目繁太郎は販路を海外まで広げ、後に瀬戸市長も務めました。

旧山繁商店には、現在、建物と塀が9棟残

されています。丘の中腹に位置する敷地は、かつて大型の窯場や卸問屋のある地区でした。また、不整形な敷地の中で増築し続けたため、複雑な配置となっているのも特徴です。細くくねった旧道沿いには離れと旧事務所を構え、その先に倉庫が4棟、軒を連ねています。さらにその奥には、昭和になって開かれた道(池田通り)に対して門が開かれ、新事務所がたっています。また、離れに隣接していた主屋(現存せず)の背後には、趣のある土蔵が行んでいます。

明治22年に建てられた、影盛された鬼瓦が載る寄棟屋根の離れは、瀬戸内外の要人をもてなすゲストハウスとして使用され、皇族もここを訪れました。緻密な石垣の塀や、雅な意匠の便所などに、その気分を感じることが出来ます。また2階の茶室は、皇族来訪の折に改修されたと考えられています。

その他、商店の顔だった新・旧の事務所や、トタンで置かれた屋根が連なる倉庫群からも、往時の繁栄していたようすがうかがえます。

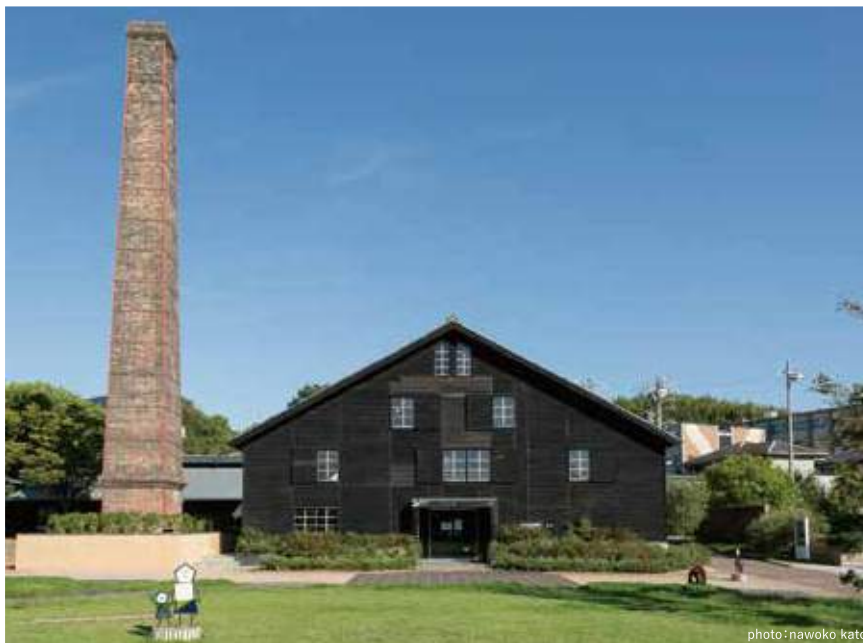
進む保存活用計画

管理する人のいない建物は傷みが早く、特に台風などの自然災害で大きな被害を受ける



土蔵。以前はこの前に主屋がたっていた

離れ / 1889年(明治22年)、塀 明治中期
土蔵 / 1903年(明治36年)、
旧事務所・新小屋 / 1914年(大正3年)、
新事務所・中倉庫 / 1947年(昭和22年)、
前倉庫 / 昭和前期、奥倉庫 / 1950年(昭和25年)
【設計】不明
愛知県瀬戸市仲切町23他



煙突と建屋を見る。2棟は地下の煙道でつながり、煙突から排煙する。レンガの煙突と黒い下見板のコントラストが美しい

窯のある広場・資料館

赤い煙突と黒い建屋が並ぶ、近代常滑の風景



鉛色に輝く窯内部の風景

タイルの聖地

INAXライプミュージアムは、世界のタイル博物館をはじめ、ワークショップの建物や研究施設もある「タイルの聖地」として全国に知られています。同博物館には世界各地の貴重なタイルが展示され、5500年の歴史を一望できるのも魅力です。

その一角に、大きな屋根に黒い下見板の張られた建物と、高さ21mのレンガの四角い煙突が並んでいます。現在、窯のある広場・資料館として、常滑の土管の歴史を紹介しているこの建物は、もとは土管を焼成するための大型の窯と建屋でした。



窯の上部。鋼材（レール）とワイヤーでトンネルの広がる力を締め付ける

窯というタイプで、幅5.5メートル、長さ11メートル、高さ3.4メートルのレンガでできた分厚いトンネル状のかたちをしています。そこに大小様々の土管をぎっしり並べ、窯の側面の焚き口から石炭をくべて焼成します。また、窯内にまんべんなく熱を回すため、床下の煙道から煙突へ排煙できるようにになっています。煙突が高いのも吸引力を強める工夫です。

建屋の2階と3階（現存せず）では、窯の熱を利用して素地の状態の土管を乾燥させるスペースが設けられていました。現在のような高精度の機械がない時代に、建物全体をシステムとして連動させたしくみがとても興味深いです。

ところで、2階に上って窯を見ると、鋼材が外側に並んでいることに気がつきます。これはトンネルを外側から鋼材とワイヤーで締める工夫で、鋼材には鉄道の古レールを使用しています。レールは外国製のものが多く、その頃の日本では鋼材の製造が難しかったことを物語っています。

窯と建屋と煙突

常滑は古くから焼き物で知られた街で、大型の甕や壺をつくっていたことが、明治以降の土管の製造につながります。横浜で初めて布設された下水道土管や、鉄道用土管、暗渠排水用土管など、大正11年には約500万本を製造し、全国各地で使用されました。

窯のある広場・資料館の窯と建物も、ちょうどその頃に建設されています。窯は倒焰式角

本場のミュージアム

かつて常滑では、レンガの四角い煙突が立ち



土管の製造に使われた道具の並ぶ展示風景

1921年(大正10年)
建屋／木造3階建て 煙突／レンガ造
〔設計〕不明
愛知県常滑市奥栄町1-1-30
※2019年秋まで改装工事

醸造

醸造業とは、発酵菌を使って酒、味噌、醤油、酢、みりんなどを製造する産業。
製造場所には、土地柄や気候風土のほか水質も深く関わる。
ひとの食物探求の旅は発酵と共にある。

photo:Akihiko Mizuno



column

愛知県 陶磁美術館

【谷口吉郎晩年の名作】

愛知県には、ここで紹介した建物以外にも、陶磁器関係の面白い建物がたくさんあります。とりわけ立派なのが瀬戸市にある愛知県陶磁美術館です。

設計は谷口吉郎。建築に詳しい人なら「おお!」となりますが、そうでない方のために紹介すると、博物館明治村を創った建築家です。明治村は谷口の呼びかけで始まりました。文化全般に造詣が深く、和風建築と近代建築の美学を独自の感覚で融合させた作風でも知られています。

愛知県陶磁美術館は、その谷口の晩年の名作です。緑の深い丘陵地にあるため、和風の屋根を薄くし、それらを重層させることで周囲の環境に馴染ませています。また、重層する屋根は望楼ぼうろうでまとめられ、全体が響き合う美しいフォルムをつくりだしています。

館内に入ると、谷口の代表作のホテルオークラの内装でも使用されたオークラランタンが出迎えてくれます。ここでもおどかな空間に合わせた和風の意匠が美しいです。また、ぴったり収まっているタイルも見逃せません。谷口はボーダータイルを好み、その製造は瀬戸で行われていました。

現在では知る人ぞ知る名作おもむきといった趣ですが、ぜひ多くの方に訪れて欲しい建築です。

それ以外にタイルつながりで紹介したいのが、岐阜県多治見市笠原町のモザイクタイルミュージアムです。建築史家藤森照信が手がけた絵本に出てきそうな建物は、インスタ映えを狙って大勢の女性が詰めかける大人気スポットとなっています。





本社事務所外観。バシリカ式の建物が2つ並ぶ不思議な風景。真ん中の渡り廊下の向こうに中庭がある

八丁味噌本社事務所

観光名所にたつ、2棟の不思議な建物



旧物置。応接室として利用されている

岡崎の名所

岡崎名物といえば八丁味噌を思い浮かべる人も多いでしょう。濃厚でキリッと引き締まった独特のkokoroのある味わいは、東海地方のみならず、全国にファンがいます。

その八丁味噌の老舗、カクキュー八丁味噌は、岡崎でもメジャーな観光スポットで、2棟の西洋建築風の建物が並び、本社事務所は、人気の撮影ポイントになっています。

本社事務所は、愛知で一番はじめに国登録有形文化財になった建築ですが、実は設計者もデザインの様式も定かではない、とても謎めいた建物です。



2階洋間。切断された格天井に注目

岡崎の歴史と八丁味噌

岡崎は、肥沃な矢作川を中心に、古くから人々が住みつけてきた歴史ある街です。その長い歴史の中で、大きな転換点となったのが江戸時代。徳川家康の生誕の地として、東海道や城下町、そして矢作川が整備され、また寺社鎮も多く配置されて、街は大いに賑わいました。

三河方面の醸造業も、岡崎を中心に発展しました。八丁味噌が本格的に産業となり、カクキューが創業したのもこの頃です。

ちなみに八丁とは、岡崎城から西へ八丁（約870メートル）離れた八丁村でつくられたことに由来します。東海道と矢作川が交差するこの辺りは、かつて川船の土場があり、そこで大豆や塩が荷降ろしされていました。

破格のデザイン

本社事務所が建てられたのは昭和2年。明治後期に最盛期を迎えたカクキューは、本蔵など大きな蔵を次々と構え、新しく事務所を建設します。

2棟は、外観のかたちがキリスト教の教会堂に似ていることから、バシリカ式と形容されています。バシリカ式とは、ミサなどを行う列柱の並んだ縦長の空間形式をいいます。こちらの2棟は内部でつながり、中庭を中心にして各部屋を配しています。また、バシリカ式教会堂が2棟並ぶ姿は、ヨーロッパでもほば見られない、珍しい風景です。

建物にあしらわれた装飾についても大胆なアレンジが施されています。

外観を特徴づける太い柱型は柱頭で止まり、真ん中の一段高い棟には、本来あるはずの明かり採りの窓がありません。それ以外にも、事務所奥の金庫室を飾る壁に埋まった



2年以上かけて熟成される八丁味噌（写真右）

オーダー風の漆喰細工や、2階洋間の途中で切断された格天井など、様式にとられない破調のデザインが館内の随所に見られ、とてもユニークな空間となっています。

これらのデザインは、明治の初期に登場した擬洋風建築を彷彿とさせます。こんな破格の建物だからこそ、他のどこにもない風景をつくり、長く親しまれているのかもしれない。

八丁味噌と同様に、街のシンボルとして愛され続ける名建築です。



本社蔵（史料館）も国登録有形文化財

1927年昭和2年木造2階建て
「設計」不明（三原氏と伝わる）
愛知県岡崎市八帖町字往還通69
http://www.kakukyu.jp/
※本社蔵（史料館）は見学可



photo:Hitoshi Kumamoto / Akihiko Mizuno

6尺桶の並ぶ味噌蔵の風景。麹菌の棲む木造の空間は、光が差し込むことで金色に輝く

中定商店味噌蔵

武豊線沿線にたつ、神秘の味噌蔵

中定商店と宝山味噌

木造の醸造蔵と木桶には、そこで育まれた麹菌が棲み、味噌などの食物を発酵させています。静かな蔵内に一筋の光が差し込んだ時、それらの棲む空間が、神々しい雰囲気を感じることがあります。

中定商店の味噌蔵は、そんな瞬間に出会える建物です。

J R 武豊駅から200メートルほど北へ、



昭二蔵(左)と昭三蔵(右)外観

線路と並行して走る国道247号線沿いに、黒塗りの大蔵が建ち並び一角があります。明治12年に創業し、味噌とたまり醤油を製造する中定商店です。



蔵の屋根が広がる風景

小道を入った先に、看板を掲げてこちらを出迎えてくれるのは、昭和3年に建てられた昭三蔵と、同じく昭和2年に建てられた昭二蔵です。

現在、昭三蔵は内部を改築し、味噌づくりのワークショップやジャズライブなどのイベントに使用されています。また昭二蔵は、中定商店の店舗として、名物の宝山味噌やたまり醤油などを販売しています。

どちらの蔵も洋小屋(キングポストトラス)を架けて、大型の仕込桶をたくさん並べられるように、無柱空間となっているのが特徴です。

武豊港と醸造業の発達

明治になり、武豊に港と駅が開かれることを知った初代中川定平は、知多半島の温暖な気候と良質の水の得られるこの地で醸造業を

開始します。そして定平の予見通り、明治19年に港と付随する停留所が建設されると、商売は繁盛し、また二代目定平の努力で品質も向上。規模を拡大します。昭和7年には、創業者の名前をとって中定商店と改名。現在も変わらぬ製法で、味噌とたまり醤油をつくり続けています。

蔵に棲むものたち

中定商店には、現在13棟の蔵があります。大きな蔵が藁を並べる風景は圧巻です。面白いのは蔵の名前で、建設年をもじってつけられています。先に紹介した昭二蔵や昭三蔵をはじめ、伝承館として改築された大五蔵は、大正5年に建てられました。

蔵には黒いタールの塗られた押板が張られ、その下は土壁になっています。また建設年が近いため、和小屋から洋小屋へ変遷する蔵の歴史を辿れるのも特徴です。

他にも、昭和9年に建てられた新蔵には、外装に半割の板が張られ、蔵前に積まれた味噌の重石の庭とあわ



名物・宝山味噌

せて、まるで現代建築の美術館のような佇まいとなっています。とりわけ印象深いのが、味噌とたまり醤油を醸造している大十蔵です。小さな窓から差し込んだ僅かな光が、100年以上使用されている6尺桶を金色に染める瞬間、その神々しい姿には、ただ息を呑むばかりです。

食前に手を合わせ、食べ物に感謝を捧げる日本人の美徳を改めて教えられるような、そんな尊い空間です。



新蔵。手前に積み上げられているのは味噌の重石

大五蔵 / 大正5年、昭二蔵 / 昭和2年、昭三蔵 / 昭和3年
愛知県知多郡武豊町字小迎51
<http://www.ho-zan.jp>
※醸造「伝承館」(大五蔵)は見学可。要予約



photo: minachom

大蔵の全景。石垣の上にそびえる姿に圧倒される。白い窓がアクセントになり、美しい外観をつくっている

みりん 九重味淋大蔵

江戸創業の老舗みりん店にそびえる、最古の大蔵



大蔵の内部

碧南の醸造業

藤井達吉現代美術館のすぐ側、西方寺太鼓堂の脇を下る石垣と漆喰壁に囲われた路地に、九重味淋本社工場があります。

昔はこの路地の先は海で、その海に向かって、黒塗りの立派な大蔵が石垣から迫り出すようにそびえていました。石垣には木で組まれた船着用のへこみの跡が残っています。

知多湾と衣浦港に挟まれた碧南には、大浜や鷲塚といった古い港があり、江戸時代にはそこに廻船が停泊しました。その先の岡崎には川船を使って、矢作川を遡上しました。

九重味淋の創業もその頃で、250年近く前にさかのぼります。海運業で財を成した石



蔵前の風景

川家は、知多半島や大浜近郊で製造された酒粕を利用して、みりんの醸造を始めます。

当時は砂糖が非常に高価だったため、甘味はみりんで付けられ、また甘いお酒としても重宝されました。

移築と増築された大蔵

黒い大蔵には面白い経歴があります。蔵はもとも、鳴海(名古屋市緑区)で1706年に

酒蔵として建てられたもので、その後1787年に石川家買い取り、現在の場所に移築されました。また、移築の際に蔵の真ん中を増築して、今見る姿になったと考えられています。蔵の中には大きな醸造設備が並び、2階部分では、かつては麹がつくられていました。

特徴的な大蔵の外観は、土壁の上に黒色の下見板が張られています。ところどころ開けられた小さな窓には、枠の部分に白漆喰が塗られています。蔵の大きさとアンバランスなスケール感が、まるで現代建築のような表情を見せています。

また、工場内には別の蔵を改装した九重味淋時代館があり、九重味淋や碧南の醸造業の歴史を貴重な資料を通じて学ぶことができます。これら資料は、石川家の帳簿などの記録と共に残されたもので、江戸時代の商人の気質をうかがい知ることができます。

おしゃれなレストランで昼食を

2018年、敷地内にある母屋を改装して、おしゃれなショップとレストランが開業しました。既存の建物をリノベーションしたきれいな店内には、みりんの熟成のようすが美しくレイアウトされ、名産品の九重櫻をはじめ、みりん

やその粕を使ってつくったお菓子やアイスクリームなどが販売されています。またレストランでは、みりんを使用したおいしい食事やスイーツが味わえます。

藤井達吉現代美術館でアートを楽しんだ後は、大蔵のある風景を散策し、絶品グルメを味わってみてはいかがでしょうか。



母屋をリノベーションしたショップ

1706年建設 / 1787年移築・増築
木造2階建て
愛知県碧南市浜寺町2丁目11番地
<https://kokonoemirin.jp/>
※九重味淋時代館の見学は要予約



蟹江川に映る本社屋。奥行きが浅いため、向こうの窓ごしに空が透けて見える

甘強味淋本社事務所

蟹江川に浮かぶ、レトロなタイルのシンボル建築



入り口周りのテラコッタ

蟹江川の目立つ看板

江戸時代に整備された蟹江川の法面に、ひときわ目を惹くタイルの建物がたっています。甘強酒造の本社事務所は、かつて街の商業の中心だった運河沿いに、看板の役割も兼ねて、鉄筋コンクリートで建設されました。この建物の背後には、住宅や蔵の建ち並ぶ敷地が広がっています。

甘強酒造の創業は江戸後期。初代の山田平八が、みりんを醸造する店を開いたといわれています。蟹江はその頃、日光川と合流する河口付近に蟹江港が開かれていて、伊勢湾とつながる海上交通の要所として栄えていまし

蔵や作業場などが建ち並んでいます。

蟹江の風景

かつての物流の中心は蟹江川でしたが、現在は道路に変わり、水上を行き来する船も見ることはなくなりました。

運河沿いには蟹江神明社や西光寺があり、静かな水面にレトロな本社事務所が映り込む姿は、なんともいえない郷愁心をくすぐります。曲がりくねった道には古めかしいお店が残り、歴史的な景観の風情があります。もち米と米麴、焼酎からつくられる、甘味が強くてコクの深い本みりんの美味しさは、今もそんな風景の中で醸造されています。



住宅と蔵も国登録有形文化財

た。また、伊勢湾をつうじて桑名などにみりんを卸していたため、販路はもっぱら関西方面だったといえます。今とは違うつながりで地図を見られるのも、歴史のある生産地の魅力です。



2階会議室

軽やかな事務所ビル

黄色いスクラッチタイルの本社事務所は、現在も甘強酒造の事務所ビルとして使用されています。運河の堤防とダイレクトに直結し、建物も法面に建てられているため、とても不思議な見え掛かりをしているのも特徴です。

外観は、縦長の大きな窓が1階、2階と違う間隔で開けられ、楽しい表情をつくっています。また、奥行きが狭いこともあって、反対側の窓の向こうに空が見え、看板のような佇まいがとても軽やかです。

入り口はテラコッタで飾られ、表札もかたちづくられています。また玄関の査脱には鮮やかなモザイクタイルが張られていて、目を

楽しませてくれます。

玄関のカウンター越しには事務所があり、奥の階段を上ると、2階には会議室や和室などが設えられています。全方向に窓が開かれ、館内は明るく開放的です。

屋上に上ると、外観のアクセントになっている見晴らし台があり、そこからは蟹江の街が一望できます。なだらかに広がる街並みに運河がまっすぐ伸び、古い道が入り組む景色は、見ていて飽きません。

堤防から東に下って広がる敷地には、本社事務所から渡り廊下でつながる住宅があり、ここには以前、大切な客を迎え入れる応接室がありました。その奥には、レンガ壁の残る



玄関タイルと名物本みりん

1937年(昭和12年)
鉄筋コンクリート造2階建て
【設計】不明 【施工】水谷工務所
愛知県海部郡蟹江町城4-1
https://www.kankyo-shinzo.co.jp
※見学不可



photo: Akihiko Mizuno / Sayaka Ito

全景。かつては塔屋から手前に向かって醸造室とボイラー室があり、レンガの煙突が空に伸びていた

半田赤レンガ建物 (旧カプトビール製造工場)

再生された、国内屈指のレンガ造工場



壊れたレンガ壁の跡。遺跡のような雰囲気

赤レンガとカプトビール

半田赤レンガ建物は、今や愛知県を代表する観光名所として知られています。

大きなレンガの壁は、装飾の少ない外観と相まってスケール感を増し、見るものに迫ってきます。ところどころ崩れた壁の切れ目には雑草が生え、遺跡のような趣も漂わせています。

観光客のお目当ては、創業当時の姿で復刻されたカプトビールです。カフェでは、地元産ソーセージなどと一緒に、ドイツ由来のコクの強い生カプトビールが堪能できます。

半田の醸造業とカプトビール工場

半田は、江戸時代から酒や酢などの製造が

保存と再生の物語

昭和20年、中島飛行機の倉庫として使用されていた建物は、空襲を受けました。その時の機銃掃射の跡は、今も北側のレンガ壁に残されています。

戦後はコンスターチ工場に転用され、平成6年に同工場の移転に伴う敷地売却のため、翌年に取り壊しが開始されました。

そのときに立ち上がったのが、赤煉瓦倶楽部半田のメンバーや半田工業高校の教員ら地元の有志でした。彼らの努力と行政の協力で建物は残り、20年以上の時間をかけて、今の姿に辿り着いたのです。

カプトビールの重厚で力強い味わいは、そんな熱い想いが込められているからなのもしれません。



復刻されたカプトビール



企画展示室 (旧貯蔵庫)。窓辺の壁の厚さに注目

盛んな土地で、カプトビールの前身となる丸三麦酒を設立した中笠又左衛門と盛田善平も醸造業を営んでいました。中笠はミツカンの四代目、盛田は敷島パンの創業者です。

明治31年、機械と工場の図面をドイツのゲルマニア機械製造所から購入し、あわせてドイツ人技師も招聘しました。

翻訳設計を行ったのは、内閣臨時建築局の妻木頼黄です。妻木は明治建築界のバイオニアのひとりで、優れた業績を残す一方、無類のビール好きとしても知られています。

カプトビールは明治33年、パリ万国博覧会で金賞を受賞するなど実績を残しましたが、その後幾多の変遷を経て、昭和18年、工場は



5層の腹壁

閉鎖されました。

半田赤レンガ建物の特徴は、前近代的な工場建築であることです。現在のような機械や設備が望めなかった当時は、地形や建物の高低差を利用して工場が計画されました。空気層を抱えた腹壁や、アーチを重層させた床は、断熱の機能を果たしました。

また、ハーフィンバーという、ドイツでポピュラーな木骨レンガ造の2層の建屋は、ビールを瓶に詰めてトロッコで出荷する場所でした。

この建物は工場であるため、いわゆる西洋建築的な装飾は控えられています。一方で近代建築は、無装飾の工場からデザインの発想を広げました。半田赤レンガ建物の私たちは、そんな変革期の建築の姿を現しています。

1898年(明治31年)建設 / 2015年改築
レンガ造2階建て塔屋5階 / 一部木骨レンガ造2階
建て改築に伴い鉄筋コンクリートで補強
【設計】妻木頼黄(翻訳設計)
愛知県半田市榎下町8番地
<https://handa-akarenga.jp/>

絨維

繊維業とは、生糸や綿、毛、麻などの天然繊維や科学繊維から糸を紡ぎ、それを織って布をつくる産業。愛知の繊維業は、桑の栽培から糸の生成、織布の製造、色つけなど多岐にわたり、産業の大黒柱として近代化を支えた。

photo:Akihiko Mizuno



column

明治村と 菊の世酒蔵

【博物館明治村】

近代建築愛好家の聖地、博物館明治村は、日本近代建築史にとっても重要なターニングポイントになった記念碑的な施設です。

昭和30年頃から始まる高度成長期は、明治以降各地に建てられた洋風建築などを壊し、新しい建物をつくることで進められました。当時、そういった少し古い時代の建物は、あまり価値を認められていませんでした。

ただ、そんな状況に早くから警鐘を鳴らしていた建築家谷口吉郎と、同窓生だった名鉄副社長土川元夫（当時）が明治村の開村に乗り出します。また開村に向けて、本格的な近代建築の調査が全国で開始されました。これをきっかけに、日本の近代建築の調査は飛躍的に進み、後世の保存活動の礎となったのです。

現在、明治村には国指定重要文化財が11件、愛知県指定文化財が1件、国登録有形文化財が52件あります。その中のひとつ、菊の世酒蔵は、幅約16メートル、長さ約33メートルに2メートルの庇が付いた大きな仕込蔵です。明治28年に刈谷の菊廣瀬酒造として建てられましたが、それ以前に穀物蔵だったものを移築したと考えられています。風貌と経歴が、どこどなく九重味淋大蔵を思い起こさせます。

醸造でいえば、明治村と同じ犬山市の城下町にある小島家住宅に、朝鮮伝来のにんとうしゅ忍冬酒という甘口の珍しいお酒があり、こちらもおすすめです。





photo:Hitoshi Kumamoto / Akihiko Mizuno

木綿蔵ちたと隣接する知多岡田簡易郵便局。ゆったりした関係性が街並みの起点として上手に機能している

木綿蔵ちた (旧竹内虎王商店木綿蔵)

街並散歩道の始まりを飾る、白い蔵



蔵前の空間。木綿ののれんが美しい

知多岡田に残る古い街並み

ゆるやかにカーブする道沿いのおかき屋辰心を目印に、岡田街並散歩道がひっそりと始まります。

一歩足を踏み入れると、そこには古い街並みが広がり、起伏のある道に沿って趣のある家屋や蔵が続いています。

入り口で出迎えてくれるのが、木綿蔵ちたと知多岡田簡易郵便局です。蔵の前面は開放され、隣の郵便局との間にはゆったりとしたスペースが設けられています。

生き残った建物

木綿蔵ちたの前には、かつて竹内虎王商店の寄宿舎がたっていました。それが取り壊された時、地元の街並み保存会が蔵の保存を訴え、木綿の機織りを後世に伝えるための施設へ生まれ変わった経緯があります。

蔵に足を踏み入れると、機織り機が整然と並び、きれいに染められた綿糸や手織り木綿でつくられた製品が蔵内を彩っています。ここでは機織り体験も行われ、柔らかな風合いの木綿製品とともに、今も多くの人に親しまれています。

休日にはここを使って、街歩きツアーやアートイベントなどが開催され、賑わいを見せています。

木綿産業と竹内虎王

知多岡田の木綿産業は江戸時代にさかのぼります。農家の副収入として機織りが行われ、江戸中期になると販路を拡大。知多半島で栽培されていたワタでは追いつかなくなり、三河からも綿を購入しました。

明治になり、繊維産業が殖産興業として進められると、多くの生産地を抱える愛知県も発展を遂げます。また明治中期頃から登場した動力織機により、手織りから機械織りが主流となり、工業化に拍車をかけました。

岡田の木綿産業を支えた竹内虎王商店は、竹内虎王自らが開発した竹内式織機を用いて織布を生産した興味深い企業です。ちなみに世界初の全自動織機を開発した豊田佐吉が、この地方で機織り機を研究したという言い伝えもあります。

木綿蔵ちたは、竹内虎王商店の木綿の収蔵庫として建てられました。防火対策が最も重要な土蔵は、密に組まれた木造の上に小舞という竹で組んだ下地をつくり、そこに綱を



蔵内に置かれた機織り機

かけて土を塗ってつくられます。その上に漆喰を塗って仕上げるため、ぼつんと開いた窓と白く塗られた外観になり、出来上がった建物は、どこか可愛らしい姿になります。

こちらの蔵は、正面を向いて入り口が2つあり、向かって左が片開き、右が観音開きの土戸となっていて、左右非対称なのも特徴です。広い軒下空間(蔵前といえます)では、荷降ろしなどの作業が行われていました。



東側の下見板張りの外観

明治後期〜大正前期頃
土蔵造2階建て
【設計】不明
愛知県知多市岡田字中谷
http://momengura.cside.ne.jp

登録／2017年6月
登録基準／造形の規範となっているもの(旧事務所)
国土の歴史的景観に寄与しているもの(その他)



北側の木綿蔵。軒を連ねた南蔵が見えている。手前の大きな蔵前で荷降ろしの作業が行われていた

旧中七木綿本店

岡田屈指の木綿製造会社の本社屋



長屋門

岡田街並散歩道

木綿蔵ちたから岡田街並散歩道を西へ20メートルほど進むとT字路があり、角に立派な長屋門がたっています。ここにはかつて、岡田の木綿産業を支えた中七木綿合資会社が本店を構えていました。長屋門をはじめ、現在も敷地内には旧事務所や木綿蔵、寄宿舎などが残されています。T字路を右に曲がると、正面には1350

年に創建された慈雲寺があり、岡田が栄えていた頃には、門前広場のお店は出稼ぎの女の子で溢れ、とても賑やかだったそうです。

中七木綿合資会社と本社屋

中七木綿合資会社は、明治29年に加藤六郎衛門らによって起業された綿布製造会社です。その時、岡田で初となる動力織機を24台輸入し、昭和初期には3つの木綿工場を所有する企業へと成長しました。

その本社屋となる中七木綿本店は、大正3年に建設されました。

岡田街並散歩道に面して19メートルの長屋門を設け、その前には堀がありました。長屋門とは、使用人の住まいや作業場、納屋などが門とひとつの建物になっている。元は武家屋敷で用いられた形式です。この長屋門も、納屋や社員の食事室、浴室が付随していました。門をくぐると正面には旧事務所が



南蔵の蔵前

あります。もとは門前広場側に向いていましたが、曳家して今の場所に移動し、住宅として使用されています。起りのついた屋根根と黒漆喰の壁は当時のままの意匠です。

旧事務所の奥には木綿蔵が2棟並んでいます。それぞれ独立した蔵ですが、蔵前がひとつにつながり、木綿製品の梱包などの作業を行える広い空間になっています。また、外壁には黒く塗った下見板を張り、漆喰で仕上げた部分も柱を見せる大壁にしています。

南蔵の2階に上がると、小窓から差し込む光が「アルプスの少女ハイジ」の屋根裏部屋を思わせ、むき出しの小屋根もその気分を盛り上げます。小屋組みを受ける柱と梁のガツガツとした構成も、建築的な見所です。このような軸組は、建物全体のプロポーションにも影響し、外観の見栄えにつながっています。

敷地内には他に作業所・寄宿舎も残り、蔵のような骨太の軸組で構成されていますが、窓は大きく開けられ、外観も旧事務所と似た黒漆喰で仕上げられています。

山七印の鬼瓦

門前広場の喧騒も今はなく、岡田の街並みは時間が止まったように、ゆっくりと流れています。



南蔵の2階

1914年(大正3年)頃
〔設計〕不明
旧事務所／木造2階建て、北蔵、南蔵／土蔵造2階建て、長屋門／木造平屋建て、作業所・寄宿舎／木造平屋建て(一部2階)
愛知県知多市岡田字開戸28-28-1 ※見学不可



ガラ紡糸のタペストリーの掛かる廊下。コの字型に中庭を囲って各部屋が配置され、館内はとても明るい

豊田市近代の産業とくらし発見館 (旧愛知県蚕業取締所第九支所)

社寺建築の細部を持つ、鉄筋コンクリートの旧試験場



外観。正面の屋根には千鳥破風が載る

鉄筋コンクリートと和風建築

開発が進む豊田市駅のほど近く、高層ビルの迫る住宅地に紛れて、低層で瓦屋根が載り、社寺建築のような斗拱を持つ建物がたっています。斗拱とは柱の上に載る構造材をいい、ここでは大斗と2本の肘木を指します。

斗拱の下の柱をよく見ると、角が切り落とされ、上から下に幅が狭くなっており、とても凝ったデザインであることが分かります。

この建物は、大正10年に蚕の病気の検査や

品種改良の研究を行う施設として建設されました。屋根は木造で、その下の軸部は鉄筋コンクリートで造られています。

このような和風のデザインと鉄筋コンクリート造を組み合わせた建物は、名古屋市庁舎などの帝冠様式の建物が代表的です。しかし、その萌芽は大正初期に起こり、この建物もそんな時代の気分を現しています。

建物の前に構える門も同じデザインで、石積みを模した柱の上部には斗拱があり、瓦屋根を支えています。

孝母町から豊田市へ

豊田市は旧名を孝母町といい、かつては養



外観の柱。斗拱と角の造形に注目

蚕を主要産業として発展しました。明治以降の繊維産業の根幹には生糸の生産があり、その輸出力は、世界大恐慌で激減する昭和5

年頃まで圧倒的なウエイトを占めていました。まさに国を支えた産業だったのです。

生糸は、蚕がつくる繭を元に製造され、その蚕のえさの桑を栽培して育て、繭を出荷するのが養蚕業となります。当時の国内で見ると、富岡製糸場を有する群馬県が圧倒的な生産高を誇り、次いで長野県、そして愛知県などが続きました。

世界大恐慌以降に衰退した養蚕業でしたが、孝母町には新しい産業の工場誘致の話が舞い込みます。それがトヨタ自動車でした。

戦後、孝母町は孝母市、そして豊田市と名前を変え、世界の自動車メーカーの本拠地として日本を支える街となつていきます。

みんなの建物

現在、建物は文化施設として、近代産業の機械やその資料、少し前の茶の間の風景などが展示されています。

また、他に学習室や実習室があり、小学校の社会見学や、教育施設としてワタを栽培するなど、さまざまな活動に使用されています。



夕日が差し込む学習室

1921年(大正10年)
鉄筋コンクリート造平屋建て(屋根は木造)
[設計]不明
愛知県豊田市孝母町4丁目45番地
<http://www.toyota-hakken.com/top.html>



photo: Hiroshi Yoshida

外観。台形の敷地を高い壁で囲い、周囲から遮断している。一方で、事務棟は開放的な明るいデザイン

墨会館

愛知県で唯一の、巨匠丹下健三の作品



事務棟内観。スクリーンで光を調整する

日本最高の建築家、丹下健三

戦後の日本建築界には、丹下健三というスーパースターがいました。初期の代表作広島平和記念史料館（1955）では、モダンデザインを日本の空間感覚と融合させ、また東京オリンピック国立屋内総合競技場（1964）では、革新的な構造とダイナミックな造形で世界中を驚嘆させました。

丹下は、世界に通用する日本で初めての建築家でした。

墨会館は、そんな丹下が新しいデザインを模索していた黎明期の作品です。

徹底された美学には、ただ圧倒されます。集会所と事務棟をつなぐ中庭には糸杉が植えられ、別世界のような静けさが漂っています。当時の丹下は、近代建築の巨匠ル・コルビュジェの造形感覚や同じく巨匠ミースのグリッド、それと和風の意匠の融合を手探りで模索していました。そんな実験を行いながらも、高いクオリティの建築にまとめ上げたところに、丹下の並々ならぬ力量がうかがえます。

墨会館は現在、小信中島公民館として市民に開かれ、ごどもから大人までが気軽に利用し、館内には穏やかな空気が流れています。

巨匠の名作は、幸福な第二の人生を歩んでいます。



事務棟会長室。以前は丹下設計の什器があった

艶金興業と本社屋

墨会館は、もとは艶金興業株式会社という染色整理加工業を営む企業の本社屋でした。

江戸時代から繊維産業で賑わっていた一宮は、明治以降の殖産興業で発展する生糸や木綿に距離を置き、毛織物に新たな活路を見出して成功を収めます。その中心の企業の一つが艶金興業でした。

昭和27年、当時社長だった墨敏夫は、新進気鋭の建築家丹下に本社屋の設計を依頼します。すでに多くのプロジェクトを抱えていた



中庭ごしに事務棟を見る。庭の敷石までグリッドが整っている

丹下は難色を示しましたが、最後は情熱に押され設計を引き受けました。

巨匠の黎明期の名作

墨会館のたつ場所は、かつて周囲にノコギリ屋根が立ち並び、トラックが頻繁に行き交う工場地帯でした。

丹下はそれに対して、外界から遮断するために敷地全体を高い壁で囲い込みました。建物に足を踏み入れると、古代ローマのアトリウムのような空に開いた天窓と、特注のテラコッタ壁が出迎えてくれます。

右手には2層の事務棟があり、左手には集会所が配置されています。集会所には電動で上下する照明器や巨大な可動間仕切りなど、当時先鋭的だった設備が設けられました。

事務棟には、豪壮な階段の吹き抜けホールがあり、2階の開口部から光が降り注いで、とても明るい空間になっています。事務所と中庭の間には上げ下げできるスクリーンがあり、障子のように光を調整できるしくみになっています。

また、館内は必要に応じて部屋の大きさが変えられるのも特徴です。それらは和風の寸法体系で整えられ、グリッドが床材の目地ま

1957年（昭和32年）

鉄筋コンクリート造平屋および2階建て

〔設計〕丹下健三

愛知県一宮市小信中島字南九反11-1

http://sumikaikan.jp/ ☎0563-962-1515 0

※見学可ただし2階は要予約。

機械

機械業とは、機械を製造する産業。紡織機などの産業機械から、電気機械、自動車や飛行機などの運搬機械、兵器の部品製造機械など、近現代を通じて発達した一大産業。戦前・戦後の愛知の発展は、機械業の隆盛なしには語れない。

photo:nawoko kato



column

ノコギリ屋根の工場

【魅力的なスカイラインの秘密】

本書でも取り上げているノコギリ屋根工場について、少し紹介したいと思います。ノコギリ屋根工場は、18世紀イギリスの産業革命の頃、紡織工場の建物として誕生したと考えられています。ギザギザの屋根が連なる姿は、採光用の高窓を開けているからです。高窓は北に向いていることが多く、安定した採光の下で織布の色味やほつれを確認するための工夫からきています。また、紡織の製造過程で必要となる湿度を調整する機能も備えています。

ノコギリ屋根の小屋組みは、安価な木材で組み上げられる木造トラスが一般的です。一方で、防火対策としてレンガや鉄筋コンクリートの壁を設けたり、屋根には瓦を載せるなどの工夫もされました。

愛知県でノコギリ屋根工場といえば一宮市です。バリエーション豊かなノコギリ屋根の工場がそこかしこに点在し、現在でも約2000棟近くが残っています。

そのひとつ、のこぎり二はノコギリ屋根工場をアートスペースにリノベーションした面白い建物です。木造の屋内は独特の静けさが漂い、現代アートとの親和性も高く、魅力的な展示が行われています。

隣接する小さい方の工場はカフェに改築され、おしゃれな空間では美味しい食事を楽しむ女性客で賑わっています。

ノコギリ屋根工場は、今後さまざまな形で再利用できる可能性を秘めているのです。





photo:nawoko kato

西棟の内部。古い壁面に暖色の照明が柔らかな光を落とす。独特の雰囲気満ちた、なんとも魅力的な空間

トヨタ創業期試作工場

ノコギリ屋根に宿る、創業期のオーラ

トヨタ自動車発祥の地

何の変哲もない建物が、独特な雰囲気を感じる建築になることがあります。トヨタ創業期試作工場は、そんな不思議なノコギリ屋根の工場です。

日本を代表する自動車メーカー、トヨタ自動車は、元は明治の終わり頃から紡織の機械を製作していました。紡とは糸を紡ぐこと、織とは糸を布へ織ることで、トヨタの創業者豊田佐吉は、画期的な自動織機を製作した発明家として、世界中にその名を知られています。



東棟の外観。防火のため亜鉛鉄板が張られている

大正15年、佐吉は豊田自動織機製作所を設立、刈谷に約10万平方メートルの規模の工場を建設しました。その一部が現在の愛知製鋼刈谷工場の前身となります。自動車研究はこの一角で始まりました。自動車の製造は佐吉の夢でした。

自動車の研究と開発の中心人物だった豊田喜一郎は、父佐吉との夢を実現するために、部品やパーツ製造の機械をアメリカの企業から購入し、それを組み立てる試作工場を建設します。昭和9年のことでした。

その翌年、記念すべき自動車第一号となるA1型試作乗用車が完成し、トヨタ自動車の歴史が始まったのです。



パネルと一緒に柱と土台も展示されている

ノコギリ屋根の工場

試作工場はもともと、ノコギリ屋根が4連並ぶ1棟の建物でしたが、現在は東西2棟に分かれています。そのうち東棟は半分の規模に縮小され、西棟も北側の半分は改築されています。また外観には、防火対策で張られた亜鉛鉄板が残り、当時の姿をとめています。

工場内には木造の小屋根組み(キングポストトラス)や、柱、土台などがほぼそのままの姿で残り、工場建築に求められた機械を置く広いスペースのための構造形式の工夫がよく分かります。豊田喜一郎は最先端の高額な機械を導入し、その代わり建物は安価な木造のノコギリ屋根の工場ですませました。

現在、東棟には展示室が設けられ、トヨタ創業期の様子や自動車製造の経緯が紹介されています。また、古い工場の雰囲気を壊さないように展示室のガラスに細心の注意が払われていることも、建築的な見どころです。

漂うオーラ

実はこの建物は、解体が決まっていました。トヨタ自動車社長の豊田章男氏は、解体される直前にトヨタ自動車創業の地を訪れ、その場に残留する空気に胸を打たれて、工場を残すこ

とを決めたといわれています。

ほぼ手付かずの状態が残る西棟には、オーラのような空気が濃密に漂っています。古めかしい工場が醸し出すオーラに、建築という文化の奥深さを垣間見ることができ、そんな稀有な建物です。



展示室はノコギリ屋根の空間を妨げないよう熟考された

1934年(昭和9年)木造平屋建て
「設計」不明
愛知県刈谷市豊田町3丁目6番地
☎0566-2914151
https://k.tomit.org/
※見学には申し込みが必要ただし、西棟は立入禁止。



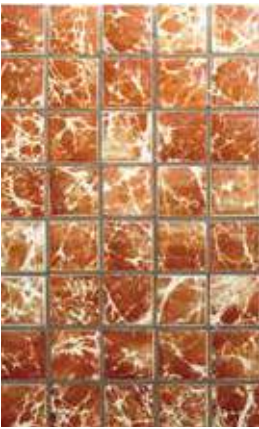
本館の外観。現在はモルタルが吹き付けられスッキリとモダンな印象。よく見ると1、2階を通す柱型が確認できる

旭サナック本館

旧兵器工場に残る、モダンな事務棟

兵器工場から産業機械の工場へ

名古屋と瀬戸をつなぐ名鉄瀬戸線沿いの住宅地が広がる丘陵地に、戦前に建てられた兵器工場の建物が残されています。そのひとつ、白いモダンな外観の建物は、かつて海軍の管轄する工場の事務棟でした。建物を所有する旭サナック株式会社は、元は大隈鐵工所旭兵器製造株式会社といい、弾丸をつくる兵器工場として建設されました。名古屋で創業した大隈鐵工所は、もともと旋盤機械を製造していました。また、近接の名鉄旭前駅もこの時に新設され、工場では約4000人が働いていたといえます。戦後、戦災を免れた工場は、敷地を東西で分け、東側を旭サナック、西側を旭精機工業として再出発し、旭サナックは塗装機や圧造機などを製造する工場へと生まれ変わりました。



玄関に張られたマーブル模様タイル

モダンな本館

10万坪を超す広い敷地には、たくさんの方々が機能に即して計画されました。施工を担当した北川組は、大隈鐵工所以外に陸軍海軍省の依頼を受けて、多くの兵器工場の建設に携わっています。敷地に入るとすぐ左手にモダンな佇まいの本館があります。大きな窓が開けられた明るい雰囲気、浅い寄棟屋根に

浅い寄棟屋根に



応接室天井の漆喰装飾



2階の応接室を見る。漆喰仕上げが美しい

は洋瓦が葺かれていました。海軍の工場であったため、洋風色の強い建物だったのかもしれませんが。入り口の壁にはマーブル模様のタイルが張られ、館内は漆喰できれいに仕上げられた白壁と天井が広がります。それと調和する木製の内装も巧みです。本館に入って驚くのは、木造とは思えないスケール感です。大きい印象を受けるのは、単に天井が高いだけでなく、シンプルな内装によるのかもしれない。

木造の立派な階段を上ると、2階には応接室や皇族が訪れた貴賓室があり、当時の瀟洒な室内装飾が残されています。とくに応接室の天井には、旧海軍のシンボルの「錨」と「櫓」が漆喰装飾であしらわれ、品格のある雰囲気を出しています。

希少な近代遺産

敷地内には他にも、大空間をもつ木造の旧講堂や骨太な小屋組みのノギリ屋根の工場が残り、いずれも建設当初の建物が今も活用されています。このような戦前の兵器工場の施設を保存、活用する事例はとても珍しく、その背景に、

所有者の理解と努力があったことは想像に難くありません。これからも大切に残してほしい、希少な近代遺産です。



本館に隣接する旧講堂。木造とは思えない大空間。以前は立派な小屋組みが見えていた

1939年(昭和14年)
木造2階建て
[設計]不明 [施工]北川組
愛知県尾張旭市旭前町5050 ※見学不可

鉄道・電信

街の産業とその発展に貢献した鉄道や電話通信などの施設。

時代と共に刷新されるため、古い施設は廃棄されるか壊されてしまう場合が多い。

愛知には珍しい施設が産業遺産として残っている。



column

トヨタ産業技術 記念館

【世界のトヨタの産業ミュージアム】

名古屋駅の北に、愛知のものづくりを紹介する上で欠かすことのできない、とっておきの産業建築があります。トヨタグループが運営するトヨタ産業技術記念館です。

もともとここには、明治の終わり頃から、豊田佐吉の研究所やレンガ壁のノコギリ屋根工場が建てられていました。それが平成6年に、トヨタグループの培ってきた繊維と自動車の産業技術を伝えるミュージアムとしてリニューアルされました。改築に際しては、レンガやノコギリ屋根の小屋組みなど工場の古い部分を残しつつ、上手に再利用しているのも特徴です。

圧巻なのは充実の展示内容です。繊維機械館では、豊田佐吉が発明した伝説のG型自動織機が動態展示され、ガシャガシャ音を立てて動くようすを目の前で見ることができます。またノコギリ屋根工場の木造の柱をそのまま生かしているため、列柱が並ぶ展示空間はとても美しいです。

一方、自動車館では、自動車の機構が実際の車を使用して紹介され、また鉄骨トラスの大空間では、製造過程が創業当時の工場の風景そのままに展示されています。

テクノランドはこどもに大人気のゾーンです。さまざまな機械の原理をオリジナルの遊具で体験でき、休日には整理券が配布されるほどの盛況ぶりです。トヨタ産業技術記念館はこどものワークショップにとっても力を入れていて、充実したプログラムには全国から予約が殺到しています。

ひそかに人気なのが、牛肉がゴロゴロはいった名物の記念館プレミアムカレーです。お土産で買うこともできますが、動力の庭を眺めながらカフェでいただくのがおすすめです。





photo: Hitoshi Kumamoto / Akihiko Mizuno

2本のレールを井形に交差、90°回転させれば直角に曲がれ、そのまま次のタンク車を転車できた

旧国鉄武豊港駅転車台

小学生に再発見された、日本唯一の転車台



覆屋を見る。以前はすぐ側に護岸があった

小学生が発見

武豊には日本でたったひとつしかない、直角二線式の転車台があります。転車台とは、機関車などの方向転換に使用された円形の設備で、ターンテーブルともいわれます。この転車台は、隣接していた武豊港駅が昭和40年に廃線になると、それ以後使用されなくなり、長い間忘れ去られていました。

転機が訪れたのはそれから34年後のこと。地元の小学生在が総合学習で武豊線を調べている時に、草むらの中で朽ち果てた転車台を発見します。その後、彼らは町長に宛てて手紙を書き、保存と整備が決まりました。

武豊の発展

転車台が設置されたのは昭和2年のことですが、武豊はそれ以前から貿易港として栄えた歴史があります。

明治18年、東京から大阪までを結ぶ幹線鉄道の建設が計画されると、大型の汽船が停泊できた武豊に資材運搬のための港が開かれます。翌年には停留所が置かれ、武豊―熱田間に鉄道が敷設されました。愛知でもっとも早



車輪のディテール

い鉄道の開通でした。

一方、当初は中山道を通す予定だった幹線鉄道は、名古屋を通る東海道へ変更されました。愛知にとって一大転機でした。

その後も武豊は物流の拠点として賑わい、石油、石炭、穀物などが海外から輸入されました。武豊が味噌などの醸造業で盛んになったのもそのためです。

石油タンク車専用の転車台

転車台は、停留所(後の武豊港駅)の側に建設されたライジングサン石油(現昭和シェル)の貯蔵タンクから、20トンのタンク車を鉄道につなぐために建設されました。

それまで稼働していた10トンのタンク車では、増加する石油の需要に対応しきれなくなり、より大容量のタンク車を運搬するために転車台が必要となったのです。

転車台の直径は7.2メートルで、2本のレールを井形に交差し、回転テーブルは8個の車輪で支え、軸を中心に回転する仕組みです。機関車の転車台に比べるとだいぶ小さいですが、全長8.6メートルの20トンタンク車の車輪が収まり、車体を作業員が手で押して回転させるにはピッタリのサイズなのです。



腕木式信号

さらに2本のレールは90°回転させるだけで方向転換ができ、効率よくタンク車を運搬できたのも特徴です。

ノスタルジックな風景

JR武豊駅から南へ1.2キロ進んだ交差点の角に、武豊停留場の碑が立っています。そのすぐ側の白い覆屋の下に、転車台はひっそりと安置され、かたわらには腕木式信号や黒光りする分岐器が置かれています。

黄昏時の古い遊園地のような風情が漂い、味わい深い産業遺産です。

1927年、昭和2年

〔設計〕不明

愛知県知多郡武豊町字道仙9-8

☎0569-7314100 武豊町歴史民俗資料館



photo: Hisao Takeuchi

旧街道からの眺め。土色の立方体が集合し、要塞のような風景をつくりだしている

トヨタック本社社屋 (旧豊川電話中継所)

旧街道に立ち尽くす、希少な電話機器のシェルター



南西からの眺め

土の要塞？

豊川稲荷から北東へ600メートルの細い旧街道沿いに、土色の要塞のような建物が存在感を放っています。

これは、90年以上前に電話通信の機器が設置された、大きな機械室のような建物です。現在は、カメラなどの光学レンズを製作する株式会社トヨタックの本社屋として使用されています。そもそも、日本で初めて公衆電話業務が始まったのは、明治23年の東京―横浜間でした。大正11年には、長距離通話のため、アメリカカ

ら輸入した最新の装荷ケーブルと真空管中継器で、東京―岡山間をつなぐ工事が開始されます。これには途中で音声を増幅させる必要があったため、中継所が建てられました。そのひとつが旧豊川電話中継所です。

通信省とモダンデザイン

南西から建物を見てみると、四角い外観に縦長の窓が不均等な間隔で開けられ、その間には1階と2階を貫く柱のような壁が確認できます。その上の軒先は、上に向かって反り上がるような形をしています。西洋建築のオーダーを意識しつつ、当時流行していた表現主義建築を強く感じさせます。

一方、旧街道から見た姿は立方体が集合したような構成で、こちらも面白い表情を見せています。

当時の電話通信は通信省の管轄で、そこには吉田鉄郎など優れた建築家が在籍していました。旧豊川電話中継所のデザインは、亀山電話中



黒大理石の階段手すり



階段

継所（現存せず）や旧通信省大分電報電話局など類似の建物があり、同省の同じ建築家が設計したと考えられます。縦長の窓は、通信省の建築によく見られるモチーフです。また耐震や防火対策で鉄筋コンクリート造を採用したのも、同省の意向でした。

建物の中に入ると、重厚な階段が2階へと伸びています。よく見ると、手すりには黒大理石が用いられ、館内を艶めかしい曲線が貫流しています。

各室は、電話通信の機器を入れるため、とても広くなっています。大きい空間を得られるのも鉄筋コンクリート造の利点です。また、窓からはたくさん日差しが差し込んで、とても明るいです。本来は機械が収まる施設だったのが、オフィスとして順応できたのもうなずけます。

生き残った建物

戦後、電話の普及が進み、電信の技術革新もあって、多くの電話中継所が姿を消しました。豊川の中継所も例外ではなく、一時は取り壊しが検討されましたが、トヨタックが買い取ることで生き残りしました。

幸運なことに、これまで大きな改修もされず、本社屋として維持管理されてきたため、とても良い姿で保存・活用されています。

豊川稲荷へ参拝した折には、ぜひ見て欲しい建物です。



1階旧電力室。現在はオフィスになっている

1926年(昭和元年)開通は昭和2年(鉄筋コンクリート造)2階建て
【設計】不明
愛知県豊川市西豊町2-35
http://www.toyotec.com ※見学可

旧豊川装荷線輪用櫓

そう か せん りん よう やぐら

【田園にたつ、コンクリートの櫓】

トヨテック本社社屋（旧豊川電話中継所）からほぼ真西へ約4キロ。陸上自衛隊豊川駐屯所を過ぎると、田畑と住宅地が広がるのどかな風景の中に、ぽつんとコンクリートの櫓がたっています。

高さは6メートルと普通の住宅の屋根より低いのですが、むき出しのコンクリートの構築物にはスケールを超えた独特の迫力があり、一見すると現代アートの彫刻作品のようにも思えます。

これは、かつて旧豊川電話中継所から伸びていた装荷ケーブル用の施設で、昭和初期に鉄筋コンクリート造で建てられました。当時は中継所と中継所の間1.8キロメートルごとに設置され、その間を木造の電信柱でつないでいました。

櫓の造形には構造や寸法などきちんとした形式があったため、以前は電信柱を辿っていくと、ごく自然に櫓がたつ風景が続いていたのだらうと思います。

また、2層の高さにはライト付きルーベのような形をした装荷線輪が設けられ、それを設置する台もありましたが、今は残っていません。この装荷線輪が、長距離間の音声電波の減衰を抑える役割を果たしました。

現在でもこのような櫓はわずかに残されているため、意外な場所で面白い風景をつくりだしているかもしれません。



飯田喜四郎先生 特別インタビュー 文化財としての建物

この本で取り上げられている建物は、今まで紹介される機会の少なかったものも多く、それを啓蒙する良い企画だと思います。

ヨーロッパでは工場をはじめとした産業建築も、一般の文化財としての建物と変わりなく評価されています。ただ、それらは転用されているケースが多く、博物館明治村のように一定の敷地に移築するのは難しい面もあります。また工場などの建物は、規模が大きいや、たくさん種類がないと面白さが伝えないこともありません。

ですから、トヨタ産業技術記念館のように、現地で保存し活用することができれば、それが一番望ましいと思います。

一方で、海外の動きに目を向けてみると、フランスでは日本よりもっと簡単に文化財にすることができそうです。私が留学していた昭和28年頃でも、すでに3万3000件が国の文化財になっていました。

そしてもうひとつ、日本との大きな違いが、景観への意識です。例えば、パリ

のノートルダム大聖堂は、建物を中心にした景観すべてが保護の対象になっています。該当するエリアは許可なしに手を加えることができず、行政と建築家が協力して保護にあたります。

その背景には、都市景観は市民の権利であるとの意識があります。そして市民も都市景観に対する思いがとても強いのです。この点が、日本と全く違います。

以前私は、愛知県と名古屋市と共同で「愛知県の近代化遺産」という報告書を編纂しました。その時に、さまざまな産業建築についても取り上げました。中でも印象に残っているのは旭サナックで、戦中に建てられた兵器工場があれだけ良い状態で残っている例は珍しく、貴重な建物です。

他にも、名古屋陶磁器会館の内装も素晴らしいですし、カクキューのように市民に親しまれている建物もある。半田赤レンガ建物も本当に良く残してくれていると思います。

有名な建築家が設計したものでなくとも、建物の状態が良く残されている

ことは大切です。日本ではメジャーな建築家の作品でも壊されてしまっていますから。

そういった意味では、残された建物はすべて「良い建築」といってもいいのです。

近代建築は、私達の生活と直接つながっていますから、その良さが伝わりづらいつつも残っています。ですが、永い建築の歴史から見た場合、とても画期的な変革で、100年前までは全然あたりまえではなかった（笑）。

そのような近代建築の特色をきちんと伝えることは、建物を理解し楽しむ際の鍵どころになります。無名の建築家が建てた建物も、そんな視点から評価し、啓蒙していくことが大切なのです。



飯田 喜四郎

1924年東京生まれ。名古屋大学名誉教授。東京大学卒業後フランスへ留学。また博物館明治村の館長を長年務めた。



建物特別公開

街がミュージアムになる日

愛知県では毎年秋になると、国登録有形文化財の建物を特別公開するイベントを行っています。

公開する建物は、ここで紹介した産業に関係する建物以外にも、住宅、学校、社寺、教会、その他の公共施設など多岐にわたります。

公開にあわせて、所有者や建築の専門家たちによる建物ガイドも行い、普段は非公開の場所も見学できるのが特徴です。

また古い街並みに残る建物をいくつも巡るツアー、特殊なテーマを持ったツアー、子どもが建物ガイドをしてくれるツアーに、音楽の演奏やワークショップなど、多彩なイベントも同時に開催しています。

いつもは立ち入ることできない建物に足を踏み入れ、美しい室内装飾に身を浸し、それらを通じて歴史に触れた時、建物はまるで街のたからものように思えてくること間違いありません。

秋の陽気につつまれて、街全体がミュージアムになる日を楽しんでみてはいかがでしょうか。

あいちのたてもの ものづくり編

2019年3月28日発行

発行者 愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会 <http://www.aichi-tobunkai.org/>
 会長 小栗 宏次
 【事務局】名古屋市中区錦三丁目6番15号先
 名古屋テレビ塔株式会社内 info@aichi-tobunkai.org

編集・企画 株式会社 都市研究所スペースア

執筆 はじめに 飯田 喜四郎
 本文 村瀬 良太

写真撮影 かとうなをこ/水野晶彦/熊本仁志/竹内久生/伊藤朋香/ヨシダヒロシ/みなちよむ

写真提供 博物館明治村

制作協力 筧 清澄

題字 水谷 月菜

イラスト・構成 村瀬 良太

デザイン 墨 昌宏 (有限会社エビスワード)



本冊子は「平成30年度文化庁文化芸術振興費補助金
 (文化遺産総合活用推進事業)」により作成しました。

国登録有形文化財とは

平成8年の文化財保護法改正により創設された文化財登録制度に基づき、文化財登録原簿に登録された有形文化財のことです。

それまでは文化財指定制度に基づく重要文化財(その中でも、世界文化の見地から価値の高いものが国宝)が指定され、貴重な建物が手厚く保護されてきましたが、その数は多くなく、急激な都市化の進展などにより、近代の建造物はその建築史的・文化的意義や価値を十分に認識されないまま取り壊される例が相次ぎました。それを決定づけたのが平成7年の阪神・淡路大震災です。震災による被害を受けた多くの未指定文化財が取り壊されてしまいました。

その反省にたち、国レベルで重要なものを厳選する重要文化財指定制度を補い、より緩やかな規制のもとで、幅広く保護していく制度として文化財登録制度が創設されたのです。

登録の基準は、原則として建設後50年を経過したもののうち、

- ①国土の歴史的景観に寄与しているもの
 - ②造形の規範となっているもの
 - ③再現することが容易でないもの
- のいずれかに該当するものとなっています。

所有者の同意のもとに登録されるもので、登録されると相続税等の減免や保存・活用に必要な修理等の設計監理費などに対する補助を受けることができます。重要文化財と比べると補助は大きくはありませんが、厳しい規制がある指定文化財とは異なり、外観を大きく変えなければ改修や改装も認められており、有効に活用していくことが期待されています。

なお、平成31年3月1日現在、全国で11,943件が登録され、愛知県は513件(全国5位)となっています。



登録文化財のプレート

愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会とは

愛知県内の国登録有形文化財の所有者を中心とする会(略称:愛知登文会)で、平成23年6月に設立されました。以下の3つを会の目的としています。

- ①登録文化財の保存と活用に関わる活動を行い、県民の文化的資質の向上を助け、日本の伝統文化の顕彰及び保全のための活動を行う。
- ②会員相互の親睦と登録文化財に関する情報交換を図り、県民との交流に努める。
- ③全国の登録文化財所有者、国や自治体とも連携を図り、登録文化財の地位の向上と啓蒙に努める。

平成23年度より文化庁文化芸術振興費補助金を受け、これらの目的を果たすための活動を行っており、本書の作成もその一つです。

なお、平成31年3月1日現在、都府県単位で登録文化財の所有者の会が設立され、活動を行っているところが、当会を含め9団体あります。これら団体が連携し、各地での取り組みの経験交流や意見交換、共同での文化庁への提言などを通じて登録有形文化財の保存・活用を推進していくことを目指した全国組織設立の動きも進んでいます。



半田レンガ建物での総会記念写真(平成28年度)